

(資料)

第 19 回舟橋聖一文学賞

第 37 回舟橋聖一顕彰青年文学賞

第 1 9 回 舟 橋 聖 一 文 学 賞 授 賞 者

作 品 名	そうじゅうろううき よしまつ 惣十郎浮世始末	出 版 社 名	中央公論新社
著 者	きうち のぼり 木内 昇		

第 3 7 回 舟 橋 聖 一 顕 彰 青 年 文 学 賞 授 賞 者

優 秀 作 品

作 品 名	むね 胸のイボ	作 品 部 門	小 説
作 者	たかや なぎさ 高屋 凧沙	年 齢	30歳
住 所	神奈川県横浜市		

第19回舟橋聖一文学賞

受賞作品

作品名 『惣十郎浮世始末』

著 者 木内 昇

受賞コメント

このたびは、舟橋聖一文学賞をいただきまして、大変光栄に存じます。

『惣十郎浮世始末』は、私にとっては初めての捕物帳となります。本作の連載をはじめるにあたり、付き合いの長い文芸記者の方から「捕物帳を書いてほしい」とのご提案を受けました。それまで捕物帳を書こうと思ったことすらなかった私は、大変戸惑いました。また、小説の題材に関しては自分で決めていたため、提案に沿って書くというのとはじめてのことだったのです。

自分の中での定法に拠ることなく、一作一作なにかしらの挑戦をしようと心がけて書いてきたものの、今回は新聞連載という大舞台。あまり冒険するのはどうか。でも、自分の仕事によい形で風穴をあけられるかもしれない——だいぶ逡巡したのちに挑戦することにしました。

この挑戦が吉と出たか凶と出たか。それは読者に委ねるよりありません。ただ、本作に登場する惣十郎や梨春、完治、佐吉、お雅といった面々と共にいる時間は、私にとってとにかく楽しい時間でした。そうやって書き上げた作品が、このような賞をいただけて、報われたように感じています。この小説に関わってくださった、すべての方に感謝申し上げます。

著者プロフィール

木内 昇（きうち・のぼり）

1967 年、東京都生まれ。2004 年『新選組 幕末の青嵐』で小説家デビュー。08 年に刊行した『茗荷谷の猫』が話題となり、早稲田大学坪内逍遙大賞奨励賞を受賞。11 年に『漂砂のうたう』で直木賞、14 年に『櫛挽道守』で中央公論文芸賞、柴田錬三郎賞、親鸞賞の三賞、25 年に『雪夢往来』で中山義秀文学賞、同年『奇のくに風土記』で泉鏡花文学賞受賞を受賞。他の作品に『よこまち余話』『光炎の人』『球道恋々』『剛心』『かたばみ』『惣十郎浮世始末』『浮世女房洒落日記』などがある。

『惣十郎浮世始末』 あらすじ

改革の嵐が吹き荒れ、疫病が日常をおびやかす江戸後期。浅草の薬種問屋「興濟堂」で火事が発生し、焼け跡から二体の骸が見つかった。北町奉行所の定町廻同心・服部惣十郎は、その不審な状況に疑念を抱き、岡っ引の完治や小者の佐吉とともに犯人を追う。一方、町医者の子春は豊かな知見で惣十郎の調べを助ける傍ら、疱瘡(天然痘)の苦しみから人々を救うための医療書の翻訳を世に出したいと奔走していた。怪しげな祈祷師の騒動や、湯屋の三助の母殺し疑惑などにも向き合いながら、やがて惣十郎は思いも寄らぬ真相に辿り着く……。罪を見つめて、人を憎まず。江戸の町に生きる人々の哀歓を時代背景とともに丹念に描く、捕物帳の新たな傑作。

『惣十郎浮世始末』 [選評]

選考委員 増 田 みず子

小説の価値は面白さに尽きます。時間を忘れて読みふけりました。作品全体を包む心地よさは素晴らしかったです。主人公が格別に善人であることも、それなりの悩みをひそかに胸に抱えていることも好ましく感じました。叶うなら隣の家に住んでいてもらいたいと思いました。何か困ったことがあったら声をかけてね、と言ってみたりしたいです。誰にでも好かれる惣十郎は、捕り物名人の同心を越えて、ヒーローに近いです。こんなにいい場面ばかりの小説を書いてくれる作家はめったにいないと思いました。

第37回舟橋聖一顕彰青年文学賞

優秀作品

作品名 小説 『胸のイボ』

作 者 高屋 風沙

受賞コメント

応募資格の三十歳である最後の年に、賞をいただけて、大変うれしく思います。

この小説は祖母との思い出をもとに書いた話で、温かい思い出も、冷たい思い出も、すべて一人の人間の物語だと思い、作品にしました。自分の祖母との思い出の欠片が、主人公真智や真智の祖母の物語の一部として、自然に溶け込んでいたらいいなと思います。

自分自身は、そんなに長い介護経験がないので、断片的な記憶と調べた内容から介護の場面は書きました。書いていて難しかったのは、祖母の年を取ることへの受け入れ難さ、認知症による混乱です。そんな祖母の姿を見て真智の気持ちに変化が生じるので、どちらの気持ちも表現したかったです。

また対比表現は、読んでいても書いていても好きなので、この作品でも美しい姿と年老いて汚れたままになっている姿を書きました。年を取るということを伝えるのを表現しやすかったこともありますし、登場人物の性格も表現できたと思います。

人のもつ様々な感情や考えを描き出すというのは難しく、書くことに消極的になることもあります。今回このような賞をいただき、より積極的に物語を書きたいと思えるようになりました。これからも日常の中の物語を自分なりに描き出せたらいいなと思います。

略歴

2014 年、関東学院大学文学部比較文化学科入学。

2018 年、関東学院大学文学部比較文化学科卒業。

2018 年、関東学院大学大学院文学研究科比較日本文化専攻博士前期課程入学。

2020 年、関東学院大学大学院文学研究科比較日本文化専攻博士前期課程修了。

2020 年、関東学院大学大学院文学研究科比較日本文化専攻博士後期課程入学（現在在学中）。

あらすじ

認知症の祖母を介護する大学生の真智（まち）は、幼い時に見ていた祖母の姿との乖離にショックを受ける。自分の胸にできた祖母と同じイボを真智は自分で切除し、清々しい気持ちになる。祖母の死後、母となった真智の胸に再びイボができる。

第37回「舟橋聖一顕彰青年文学賞」 選考講評

選考委員 増田 みず子

小説は好きなことを好きなように書けばいいと思っています。小説を書きたいと思ったのは、その自由さに心ひかれたからでした。一人の人間の、誰も知らない心のうちが、誰にでもわかるように書かれているのが驚きでした。人の心はわからない。自分の心も整理がつかない。それが知りたくて、次々と小説を読み続けました。大人になる少し前あたりから、小説らしきものを書きはじめました。最初に書いたものがどんなものだったのか覚えていません。形になりませんでした。ばらばらの言葉が、つながりもなく並んでいただけでした。30歳のとき、初めて何とかまとめることができ、雑誌の新人賞に応募しました。結果、最終候補の4作に残ったという知らせが届きました。で、落選しましたが、また新しいものを書いて送るように、という言葉編集部からもらえました。それ以後も書けなくて苦勞しました。どうやって書いたのか、書き終わると、忘れてしまいます。一作ずつ、書くたびにじたばたします。なかなか内容のある正しい文章が書けない、というのが実感でした。あがいているうちに何となく呼吸困難状態がやっと解消された感じがすると書き終わっています。ずっとそんなふうです。少しうまくならないし、らくにもならない。でも不思議なことに、飽きない。これしかこんなに夢中になれるものはない、と思っているのです。

今回、青年文学賞の審査をしていて、皆さんの作品を読みながら、そういうことを思いだしていました。自分なりの小説の形を作ろうと頑張っている感じが伝わってくる作品が多かったのかもしれませんが。小説は、一番大事なものは、真似が厳禁ということです。自分が新しくつくり出さなければなりません。そこが魅力でもあるのですが、案外その実現がむずかしいのは、ほとんどの人が小説を書き始めるのは人の小説を読んで自分もこういうものを書きたいと思うからです。

「胸のイボ」受賞おめでとうございます。まず、タイトルにびっくりしました。このタイトルで小説を面白く読んでもらうにはどうすればいいか、考えました。書けません。でもこの作者は自分のおばあちゃんの胸のイボを作品の中心におきました。おばあちゃんのイボなら孫娘はその胸に抱かれてそのイボに愛しさを感じる、と読みながら気がつきました。そして自分の祖母にも鼻の横に大きなイボがあったのを思い出して急に愛しくなりました。老いて、せつないよ、というのが口癖になった祖母を、孫娘が身の回りの世話をするようになる、大変だけど孫娘の記憶のなかに祖母のシンボルのようにイボが残る。やがて自分にも同じ場所同じ大きさのイボができる。気持が悪くてとってしまふ。結婚して子供ができると、その子供にも同じようなイボが…。この作者の仕組んだ小説の形が見えてきます。

ついでですが私の祖母のイボは母と私を飛び越して私の妹の鼻の横に出現しました。「胸のイボ」を読んだあとはずっとそのことが頭から離れません。小説の力です。

第19回 舟橋聖一文学賞



(c) 関めぐみ

きうち のぼり
木内 昇 さん

※写真使用時は「(c)関めぐみ」のクレジットを表記してください。

※トリミング等、顔を触らない範囲での写真加工は可能です。

第37回 舟橋聖一顕彰青年文学賞



優秀作品 たかや 高屋 なぎさ 風沙 さん

※トリミング等、顔を触らない範囲での写真加工は可能です。

舟橋聖一顕彰青年文学賞

過去の応募件数

年 度	青年文学賞	
	回数	件数
平成元	1	100
平成2	2	40
平成3	3	159
平成4	4	113
平成5	5	70
平成6	6	93
平成7	7	155
平成8	8	178
平成9	9	133
平成10	10	152
平成11	11	146
平成12	12	111
平成13	13	111
平成14	14	73
平成15	15	100
平成16	16	92
平成17	17	111
平成18	18	68
平成19	19	58
平成20	20	68
平成21	21	96
平成22	22	66
平成23	23	75
平成24	24	75
平成25	25	61
平成26	26	61
平成27	27	58
平成28	28	65
平成29	29	39
平成30	30	53
令和元年	31	25
令和2年	32	39
令和3年	33	40
令和4年	34	33
令和5年	35	45
令和6年	36	32
令和7年	37	38

都道府県別応募件数

都道府県	応募件数(延べ)	
北海道		
青森		
岩手		
宮城	1	
秋田		
山形		
福島	1	
茨城	2	
栃木		
群馬		
埼玉	3	
千葉	1	
東京	9	
神奈川	7	
新潟		
富山		
石川		
福井	1	
山梨		
長野		
岐阜		
静岡		
愛知	1	
三重		
滋賀	(1)	4
京都	2	
大阪	3	
兵庫		
奈良		
和歌山		
鳥取		
島根		
岡山		
広島		
山口		
徳島		
香川	1	
愛媛		
高知		
福岡		
佐賀		
長崎		
熊本		
大分		
宮崎		
鹿児島	2	
沖縄		
その他		
計		38

()内 彦根市再掲
14都府県から応募

※令和2年度から応募要件を変更し、満18歳～満30歳の年齢制限を満13歳～満30歳に引き下げています。なお、今回の応募最年少は13歳でした。

舟橋聖一文学賞規程

(趣旨)

第1条 彦根市民が豊かな心を育み、彦根市に香り高い文化を築くため、舟橋聖一文学賞を制定し、彦根市名誉市民である舟橋聖一文学の世界に通ずる文芸作品に対し、賞を授与するものとする。

(授与)

第2条 舟橋聖一文学賞の授与は、年1回とする。

(対象)

第3条 舟橋聖一文学賞の対象となる作品は、次の各号に掲げる要件を備える作品とする。

(1) 作品の種別が小説であること。

(2) 毎年6月1日を基準日とし、概ね同日前1年に刊行された単行本であること。

(選考委員会等)

第4条 前条に規定する表彰候補作品を選考するため、舟橋聖一文学賞選考委員会（以下「委員会」という。）を置く。

2 委員会は、市長が委嘱する委員で構成する。ただし、舟橋聖一顕彰青年文学賞の選考委員との兼務は妨げない。

3 前項に規定する委員は4人以内とし、その任期は4年とする。ただし、再任は妨げない。

4 特に市長が必要と認めた場合は、顧問を置くことができる。

(委員長)

第5条 委員会に委員長を置く。

2 委員長は、委員会の委員の互選により定める。

3 委員長は、委員会を代表し、会務を総理する。

4 委員長に事故があるときまたは委員長が欠けたときは、委員長をあらかじめ指名した委員がその職務を代理する。

(会議)

第6条 委員会の会議は、必要に応じて委員長が招集し、委員長がその議長となる。

2 委員会の会議は、委員の半数以上が出席しなければ開くことができない。

3 会議の運営に関し必要な事項は、委員長が委員会に諮って定める。

(授賞)

第7条 授賞作品は、委員会の意見に基づき、市長が決定する。

2 授賞作品は1作品とする。ただし、授賞作品がないときは、この限りでない。

3 賞は正賞および副賞とし、副賞は賞金とする。

(補足)

第8条 この規程に定めるもののほか必要な事項は、市長が定める。

付 則

この規程は、平成19年7月20日から施行する。

付 則

この規程は、平成24年4月 1日から施行する。

付 則

この規程は、平成24年9月23日から施行する。

第 37 回「舟橋聖一顕彰青年文学賞」作品募集要綱

趣 旨

作家・故舟橋聖一氏は、井伊直弼公を題材にした小説『花の生涯』を執筆し、それが後に映画や演劇となり、また第 1 回の NHK 大河ドラマとして放映されたことで、直弼公と彦根市の名が全国に知られるようになりました。そのため、本市では、このような多大なる功績をたたえ、同氏を彦根市名誉市民第 1 号にするとともに、広く青少年の文学奨励をはじめ、教育・文学の振興を図るため、同氏を顕彰する文学賞として、平成元年度から文学の登竜門となる「青年文学賞」を設けました。

今年度も下記のとおり全国の青年各位から優れた作品を公募します。

記

- 1 設 置 者 彦根市
- 2 選考委員 佐藤 洋二郎（作家）
藤沢 周 （作家）
増田 みず子（作家）
富岡 幸一郎（文芸評論家）
- 3 応募要領
 - (1) 応募作品 小説・随筆・戯曲・評論
※同一作品部門の応募は、1 人 1 編に限る。
 - (2) 応募規定 400 字詰め原稿用紙 50 枚以内（随筆については、10 枚以内でも可）で縦書きとする。
（ワープロ原稿の場合は、A4 サイズ横・1 行 40 字×25 行で縦に印字し、400 字詰め換算枚数を明記する。）自作未発表の作品に限る。生成 AI の使用は不可とする。
※郵送または持参による提出の場合、応募作品には、指定の応募票を記入および添付すること。
 - (3) 応募資格 令和 7 年 9 月 1 日現在、満 13 歳以上満 30 歳以下
（平成 6 年 9 月 2 日から平成 24 年 9 月 1 日までに生まれた人）
ただし、今まで入賞した作品部門での応募はできない（佳作を除く）。
 - (4) 応募期間 令和 7 年 6 月 1 日（日）～9 月 1 日（月）（郵送の場合は、当日消印有効）
 - (5) 提出先 〒522-0001 滋賀県彦根市尾末町 8 番 1 号
彦根市立図書館内「舟橋聖一記念文庫」事務局
電話 0749-22-0649
 - (6) 提出方法 以下①～③のいずれかの方法による提出とする。
①インターネット（彦根市電子申請サービス）
②郵送（封筒の表には「青年文学賞応募作品在中」と朱書すること。）
③持参（封筒の表には「青年文学賞応募作品在中」と朱書すること。）
 - (7) その他 ※応募作品は、一切返却しない。
※入賞作品の著作権は、彦根市に帰属する。
※最終選考に残った作品は、受賞録に作品名、氏名等を記載することがある。
※入賞作品を収録した受賞録は、彦根市ホームページ上で公開する。
- 4 賞 優秀作品には、「舟橋聖一顕彰青年文学賞」を授与する。
正 賞 賞状および舟橋聖一色紙
副 賞 金 15 万円
※なお、佳作はなしとする。
- 5 発表期日 令和 7 年 11 月～12 月予定（報道関係に発表する。）
- 6 授 賞 式 令和 7 年 12 月予定

令和7年度「舟橋聖一文学賞」「舟橋聖一顕彰青年文学賞」選考委員プロフィール

きとう ようじろう
佐藤 洋二郎（作家）

昭和24年6月 福岡県生れ 元日本大学教授

平成7年 「夏至祭」で**第17回野間文芸新人賞**を受賞。

平成11年 「岬の蜩」で**第49回芸術選奨文部大臣新人賞**を受賞。

平成13年 「イギリス山」で**第5回木山捷平文学賞**を受賞。

主な著書 『夏の響き』『未完成の友情』『お母さんブタのダンス』『グッバイマイラブ』『親鸞 既往は咎めず』『Y字橋』『夜を抱く』『日本史の嘘』など多数。

ふじさわ しゅう
藤沢 周（作家）

昭和34年1月 新潟県生れ 元法政大学教授

昭和59年～平成8年 書評紙「図書新聞」の編集者を務めた。

平成5年 「ゾーンを左に曲がれ」で作家デビュー。

平成7年 「外回り」第113回芥川賞候補。

平成9年 「サイゴン・ピックアップ」第117回芥川賞候補。

平成10年 「砂と光」第118回芥川賞候補。

平成10年 「ブエノスアイレス午前零時」で**第119回芥川賞**を受賞。

「死亡遊戯」「SATORI」「ソロ」「サイゴン・ピックアップ」野間文芸新人賞候補。

主な著書 「紫の領分」「焦痕」「箱崎ジャンクション」「雪闇」「心中抄」「キルリアン」「波羅蜜」「武曲」「武蔵無常」「サラバンド・サラバンダ」「世阿弥最後の花」「鎌倉幽世八景」等。

ますだ みづこ
増田 みづ子（作家）

昭和23年11月 東京都生れ

昭和54年 「ふたつの春」「慰霊祭まで」で芥川賞候補。

昭和60年 「自由時間」で**第7回野間文芸新人賞**を受賞。

昭和61年 「シングル・セル」で**第14回泉鏡花文学賞**を受賞。

平成3年 「夢虫（ゆめんむし）」で**第42回芸術選奨文部大臣新人賞**を受賞。

平成13年 「月夜見」で**第12回伊藤整文学賞**を受賞。

主な著書 「麦笛」「自殺志願」「内気な夜景」「火夜」「理系的」等。

とみおか こういちろう
富岡 幸一郎（文芸評論家）

昭和32年11月 東京都生れ 関東学院大学教授

昭和54年 「意識の暗室 埴谷雄高と三島由紀夫」で、**第22回『群像』新人文文学賞評論優秀作**を受賞。

平成元年 「内村鑑三」で第2回三島由紀夫賞候補。

平成24年4月 鎌倉文学館館長に就任。

主な著書 「戦後文学のアルケオロジー」「仮面の神学 三島由紀夫」「使徒的人間 カール・バルト」「千年残る日本語へ」「川端康成 魔界の文学」「平成椿説文学論」「入門 三島由紀夫」など多数。近著に「石原慎太郎の時の時 「戦後」への最後の反逆者」「ビジネスエリートのための 教養としての文豪」等。

「作家・舟橋聖一」のプロフィール

舟橋聖一は、明治37年12月25日、東京市本所区横網町に生まれたが、幼少時代から病弱のため学校を欠席がちであった。7歳の時、祖母に連れられて初めて「市村座」の舞台を観劇し、8歳頃から少年雑誌・新聞小説に親しみ、9歳から11歳にかけて二葉亭四迷の「平凡」、国木田独步の「牛肉と馬鈴薯」、岩野泡鳴の「耽溺」、田山花袋の「蒲団」、泉鏡花の「高野聖」等を愛読した。この時代の読書で身につけた教養が、その後の芝居と相撲に一生の情熱を注ぐ環境を作り上げたものと思われる。

大正11年（17歳）、水戸高校に入学するや、同人雑誌「歩行者」の同人となり、戯曲「支配する力」など数篇を発表した。また、菊地小劇場の東屋三郎の紹介で、小山内薫の門下に入った。

大正14年（21歳）、東京帝国大学に入学。池谷信三郎・村山知義・河原崎長十郎等と新劇団「心座」を結成。また、学内の文芸雑誌、「朱門」を阿部知二・池谷らと創刊し、初小説「信吉の幻覚」を発表した。翌年「朱門」に発表した戯曲「痼疾者」が、直ちに5月、新橋演舞場で、「心座」によって上演され、上司小剣、秋田雨雀に認められた。9月には、戯曲「白い腕」を菊地小劇場で「心座」によって上演された。10月には、この作品を今東光推薦で〈新潮新人号〉に発表して、初めてまとまった原稿料を得た。また、「心座」では今日出海と知り合う。

昭和3年（24歳）、新人作家19名による「新人クラブ」結成に参加。その機関紙「文芸都市」の同人となり、同人の井伏鱒二、外村繁らと親交を結び、戯曲「檻樓」を発表。3月、東京帝国大学卒業。卒論は、「岩野泡鳴の小説及び小説論」。卒業後、明治大学予科講師となる。「文芸都市」に評論「演劇時評」を毎回連載（～昭和4年8月）。文芸家協会会員になる。

昭和4年（25歳）、「心座」退会。劇作家から小説家へ転向する。

昭和5年（26歳）2月、畏友・今日出海らと劇団「蝙蝠座」を4月に、小林秀雄、吉行エイスケ、井伏鱒二、今日出海らと「新興芸術派倶楽部」を結成する。6月、〈新潮〉に戯曲「バンガロウの秘密」発表。戯曲集「愛慾の一匙」を処女出版した。10月、〈文学時代〉に「海のほくら」を発表し、川端康成の賞賛を受ける。

昭和7年（28歳）、「あらくれ会」の同人となり、徳田秋声門下になる。上越線車中で傾倒していた谷崎潤一郎に出会う。

昭和8年（29歳）、「行動」創刊。中心的役割を果たす。翌年10月、「行動」に「ダイヴィング」を発表し、行動主義の宣言をして文壇の注目を引いた。おりから、フランスの新文学に現れた知識人の政治的参加の行動性が話題になる時勢だったので、舟橋氏の能動性が時代のオピニオンリーダーの役割を果たすことになった。この時培われた精神力が、戦後日本文芸家協会の再建に、言論統制に、税金問題に、自分の信念を押し通す実行性と合理主義を兼ね備えることになった。

昭和10年（31歳）、「行動」が終刊、舟橋氏の行動主義への緊張がスランプに陥ることになったが、短編小説「木石」、評伝「岩野泡鳴伝」が、再び舟橋文学の面目を確保せしめた。戦争中は、時世にもろともせず、昭和16年（37歳）から執筆し、終戦間際に完成した「悉皆屋康吉」は代表的傑作である。

戦後は、執筆に対する制約がなくなると、「裾野」、「雪夫人絵図」、「花の素顔」、「芸者小夏」など愛欲小説が次々に発表され、名実ともに舟橋文学が確立された。

昭和26年（47歳）、日本古典文学の代表作「源氏物語」を平易に現代語で戯曲化した。戦後の歌舞伎に新作の流行を生み、演劇史上画期的な作品である。また、現代語による古典物を普及させるなどその意義は大きい。国文学趣向を取り入れた「ある女の遠景」は異色のもので、昭和38年（59歳）に「毎日芸術賞」を受賞している。歴史小説では、「白い魔魚」・「夏子もの」に次いでベストセラーとなった「花の生涯」や自伝小説「真贋の記」・「文芸的グリンプス」がある。

昭和39年（60歳）に、彦根市名誉市民第1号。昭和42年（63歳）には、「好きな女の胸飾り」で「野間文芸賞」を受賞。同年に芸術院会員となり、昭和50年（71歳）に文化功労者に選任されるなど、その功績は枚挙に遑がない。

昭和51年（72歳）死去。（1月13日）

明治大学文学部教授。文芸家協会初代理事長。日本相撲協会横綱審議委員会委員長。運輸省交通委員。文部省国語審議会委員。中央競馬会名誉顧問。日本近代文学館創立常務理事など。